

第五回「文芸思潮」短歌賞 発表

第五回「文芸思潮」短歌賞に御応募くださり、まことにありがとうございます。今回は五八名一〇六首と、前回に比して多くなり、中間層も入選・佳作を含めて増え、層が厚くなったことは喜ばしい限りです。日本の伝統に則った自然と人生とに和した短歌が多く、期待に応えていただいて印象を強くしました。厚く御礼申し上げます。

集まった応募作の中から、まず予選担当によって第一次、第二次、第三次の選考が行なわれ、それらを通過した作品を対象に、四月三十日、福田淑子・五十嵐勉両選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

残念ながら今回も前回に続いて最優秀賞は該当作がありませんでしたが、全体に予選落ちの作品は減り、伝統短歌の流れに乗った作品が増えたことは、賞としての前進を感じさせてくれました。この息吹のうちにまた優れた歌が寄せられることを次回に期待したいと思います。

第六回「文芸思潮」短歌賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

(「文芸思潮」短歌賞選考委員会／文芸思潮)

優秀賞

石井和子

(和歌山県西牟婁郡)

清水隆司

(千葉県松戸市)

瀬戸内光

(東京都北区)

風樹 茂

(東京都荒川区)

久保信之

(神奈川県横須賀市)

奨励賞

新井巳喜雄

(埼玉県児玉郡)

華央子

(北海道茅部郡)

渡良瀬愛子

(千葉県柏市)

武藤蓑子

(東京都多摩市)

瀧口洋子

(東京都調布市)

竹浪和夫

(青森県むつ市)

釜中 孝

(埼玉県越谷市)

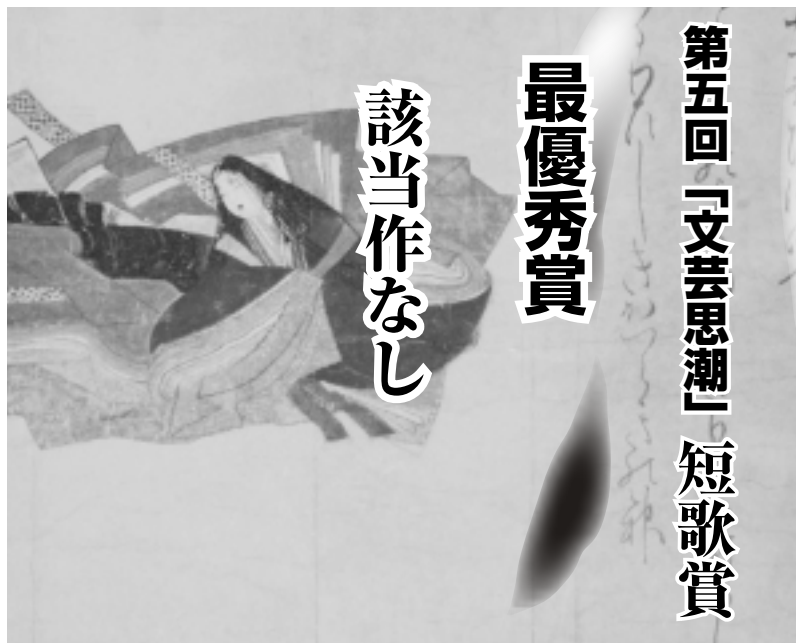
室町 眞

(東京都町田市)

第五回「文芸思潮」短歌賞

最優秀賞

該当作なし



選評

昇華への意志が不在

五十嵐 勉

第五回の短歌賞は、三回続いて最優秀賞が出ない結果になった。「深い思いと叙景が密接に絡み合って天に届くような昇華を見せている歌」を一方で期待はしているものの、それにふさわしい名歌はそう簡単に出るものではないとは思いつつ、こちらの呼びかけ不足もいろいろ考えてしまった。しかし昨年引き続き、全体に層が厚くなっていることは確かで、寄せられた短歌のほとんどが三次予選以上のレベルであったことは、喜ぶべきことと思ひ直したりした。石井和子氏は三年連続で最優秀賞に近い位置を占めたが、今年もその弱点を克服していないように思えた。

「透きとほる化身にて逢ふ夢あらば飽きたらふまで散れよ橡の葉」

「化身」「夢」など抽象的な言葉や表現が、それなりのはかなさを乗せて、現身の浮遊性を出して思いの強さを打ち出しているのだが、逆にそれらが夢や幻の弱さを引きずってしまっていて、読者の共感に具体的に届かない。ぼんやりと感覚はわかるし、調べも美しいのだが、具象性の

確かな手ごたえによって共有していく動かしえない共感にまで昇華してほしい。もう一首の下句「金魚の優雅なターンは続く」は、ただけない。「優雅な」などと言った時点で、墮してしまっている。「範疇」のような抽象語も、短歌の中には自分で禁ずるべきだろう。第二回の最優秀賞辻花ひろ氏は九十四歳だったので、年齢によるものは考慮しない。奮起してほしい。

優秀賞の清水隆司氏の歌は、上の句の抽象的問いが、下の句の動作姿に向かってしつかり収斂していく具体性が、そのまま一つの答えとなっているところに勁さがある。

「虚ろなる命の意味を問ふわれに背向けしまま葱刻む母」できれば最初の抽象的問いも具体的な言葉で表現できれば最優秀賞に接近する。二首目は短歌に「リア王」など出してくるようでは、アウト。こんな短い詩形に他の文学作品品を持つてくるのはそれだけで失格。自分の言葉で言うべきで、他者や他の権威に依存することは禁。

同じく優秀賞の瀬戸内光氏の歌は、作者の命への優しさが反映されていて、それが歌に膨らみと奥行きを与えている。

「束縛とゆめ思ふなよ切り戻しせぬ庭の菊に縄をかけつつ」

「人日の雪ひとしきり降りしきり鴨居の溝の翳らひにけり」実績は相当積まれている方で、用語も語彙豊かで知識を駆使している。「切り戻し」は「植物の伸びすぎた枝や茎などを切り縮めること」で、「人日」は一月七日の七草が

ゆを食べる日。どちらかと言えば後の歌の方が、微妙な陰りが表現されていて、奥ゆかしさも宿っているが、翳や微妙さだけに捕らわれず、大きい視野や世界での感受性が表現できるようになると飛躍するだろう。

風樹茂氏は異国体験が歌のダイナミックな感受世界を構築していて、現代でなければできない広がりがある。

「ギラギラの光渦巻くアラブの地我が汗一滴土漠に沈まん」

広大な自然の世界と自らの一滴の汗の対比が、生きている実感をよく捉えている。あと、単なる描写ではなく、その風景の中にいかに命としての自分を自覚するか、その深まりが結晶されるようになれば、一つの地点に到達するだろう。もう一種のウクライナ・ガザ戦争を扱ったものは、だれでも言える非当事者の雑感なので、注目に値しない。

久保信之氏の歌は、磨きがかかっていないが、むしろ素朴な、乗り物内の風景と外の流れ過ぎる風景が、はかなく過ぎていく時の実相を捉えていて、いい味を出している。

「夜汽車より母に抱かれし子の眺む窓の外には月流れゆく」

特に「月流れゆく」が決まっていて、子どもの未来と流れゆく天地の時間の移ろいに、命の深みが宿って、純朴な味わいがある。もう一首の方は、「うたた寝」や「夢」などとりとめのない言葉を弄んでいて、はるかに結晶度は落ちる。「夜汽車より」のような歌が自然に詠めるようになれば、もっと歌の世界は広がっていくだろう。期待したい。

奨励賞の武藤蓑子氏の歌は練れていて、背後の味は深みがあるが、決めがもう一つ鮮やかになっていない。

「疵が呼ぶ声かとばかり目覚めれば溜池あたりで郭公鳴きたり」

「疵」は亡くなった母に用いる言葉だが、現代において生きている言葉とは言にくい。「とばかり」や「あたりで」に無駄な言葉の空隙がある。また「溜池」も、固有名詞なのか普通名詞なのか判然としない。

瀧口洋子氏の歌は季節感と郷愁がうまく溶け合っていて、吊るし柿による色彩も鮮やかだが、だれの三回忌なのか、はつきりしないところに、死との重なりがやや希薄になっている点が惜しまれる。

「つるし柿かみのやま駅朱に染まるひとり降り立つ三回忌の朝」

また柿の朱と、朝早くすると朝焼けの朱とが、混じることになって、やや濁る感じが出るのがマイナスになる。

「柿色の枯れ葉散る道ポストへと薄曇はがきコトリと落とす」

もいいが、臨場感の大きさは前歌が立ち上がっている。渡良瀬愛子氏の雪の夜の歌は、過去への追憶がレコードの回転となって針先に灯る細かな感覚がいい。

「窓を打つ幽かな雪に遠き夜のレコード針の音を思へり」新井巳喜雄氏はこれまで過疎化の村の消極的変化を捉えてきたが、今回はむしろ積極面を取り上げているのは好感

が持てた。

「山峡に生きる農家の気骨あり天に向かひし棟の高さよ」過去の美点や勢いを探り、それを復活させる方向を目指せば、大きな幅を持つようになるだろう。ただ、短歌としての凝結度には絶えず細心の注意を払ってほしい。「曇りなく」の日本刀を題材にした一首は、単に真剣の描写に終わってしまっている。

釜中孝氏の叙景歌はきれいでまとまっているが、紫陽花を愛でるに留まっている。だれかが紫陽花を描写すれば似たり寄つたりの歌になりそうな既視感が拭えない。

「紫陽花は雨後の光につつまれて青い小花に雫をまとふ」

ここに「天地人」の「人」の何かを添えることで、もっと彫りを深くすることができるとは思ふ。人の思いによって、対象は変化する。それを表出してほしい。

竹浪和夫氏の護衛艦と白鳥の取り合わせは対照的でシーンが映える上に、折からの夕陽でいつそう鮮やかな色彩で染めかけてくる。

「護衛艦の船縁に寄る白鳥に兵は餌やる夕陽に染まり」

華央子氏の花の命に寄せる繊細なやさしさは調べとともに息づきを深めている。いい歌になった。

「雨過ぎて白き一華のはかなげに香る雫を小指に濡らす」

室町眞氏の歌は、大学建物の巨大化の変化のうちに、すでに失われた往時の学生運動の思い出を重ねている。題意

既成から解き放たれた表現へ

福田淑子

AIが自在に言葉を操る時代になった。それは私たち人間が長年編んできた言語表現の大量の情報をもとに、巧みに再構成しているにすぎない。とはいえ、その膨大な知の集積から名歌といわれるものも編み出されるかもしれないが、自ら歌を詠むことによって喜びを見出すのは、人だけである。

人はだれも、膨大な宇宙空間の中に生まれ出て、ポツンと放り出された小さな肉体を痛切な出来事や理不尽な事件に晒しながら、ささやかな幸せを求めつつ大方は壊れずに終りの日まで生き続けている。無事生き続けることは奇跡のようでもある。生き続けながら湧き出てくる様々な思いを自己表現できれば、そこには不条理へのカタルシスもある。それが他者の共感を得るものであれば、さらに癒される。短歌は含みを持たせた想いを伝えあうことのできる日本文化の生み出した珠玉の韻律の一つである。

短歌の歴史は長い。だから既視感のある表現や、AIにも予測可能な類想的表現ではつまらない。「文芸思潮」の求める短歌は、ありがちな歌や既成の短歌の制約を超える歌。とはいえ、了解不可能な「新しさ」や「オリジナリ

は平凡だが、マンモス化し、統合されていく巨大化・組織化への警鐘は、一石を投じている。ただ、学生運動を知らない人たちへの伝達としては、何かが欠けている。

「紛争に打ち壊されし我が母校いまや風巻くタワーとなれり」佳作でも、島田和生、有友紗哉香、上野卓男、佐山広平、槭冬弱虫、山本明、緋沙、北村灰色、野葛間各氏の歌は、胸に伝わってくるものがあり、惜しまれた。「夢」とか、

「幻」とか抽象的な言葉はできるだけ排除し、具体的なものによって、その奥にある感情を、客観的に表現してほしい。よく推敲し、どうやったら他者に伝わるか、できるだけ客観性を備えて、磨き上げてほしい。

現代の新聞では、安易、安直な歌が流行しているが、それらには与しない、深い底にある感情を表出してほしい。心を深くして命と共鳴することが、短歌の本質だからである。



五十嵐 勉
いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
79「流瀉の島」で群像新人
長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・
NTTプリンテック主催第1
回インターネット文芸新人賞
最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学
賞受賞
15より歌人越山しづかの勧め
で短歌誌「美知思波」入会

佳作

村山政子
上野卓男
佐山広平
中村成吾
愛満知留
豊代珪子
尾崎厚子
有友紗哉香
岩谷隆司
成田洋子
海神瑠珂
野葛間
北村灰色
鈴木あぐり
島田和生
緋沙
山本 明
槭冬弱虫
神戸 宅
高橋 良



入選

風間洋平
齊藤宏壽
水越晴子
松田早苗
東家芳寛
松本 進
原比呂子
堀 隼人
たもでんと
愛闘希
ミラサカクジラ
天ミソラ
高田津優
葵井禎子
日下直哉
原 ナオ
山月 恍
遠藤玲奈
福井雅人

ティ」ではだれの共感も得られない。短歌のリズムにゆだねつつ、そこに取り込む思いや言葉の連なりは、自らの思いや意図を超えて他者に語りかけ、見知らぬ誰かにも新たな心的体験を想起させるものでありたい。

「文芸思潮」短歌賞では常連の石井和子氏。近來、その端正で熟達した石井氏の歌は心に響く。

透きとほる化身にて逢ふ夢あらば飽きたらふまで散れよ橡の葉
出奔もしえざるわれの範疇に金魚の優雅なターンはつづく

石井和子

石井さんの歌は卒寿を越えて調べは一層瑞々しい。「透きとほる化身にて逢ふ夢あらば」という幽玄な美の比喩と仮定法の次に、「飽きたらふまで散れよ橡の葉」という、季節の終焉を勢いづける激しい落葉の実景を添える巧みさ。また、二首目は「出奔もしえざるわれ」という自嘲的な内省で始めて、次に軽妙な動きで狭い金魚鉢の中をターンをする金魚の動きを描写して、あたかも家に縛られてきた己の人生の不自由さを揶揄しつつ、そんな中でも金魚の様な優雅なターンを模倣してみたらと言いつけて聞かせているかのようである。この場合「範疇」という固い哲学用語が生きているのではないか。二首ともに、「透きとほる化身」と「散れよ橡の葉」、また「出奔もしえざる」と「優雅なターン」、それぞれ俳句ではよく用いられる二物衝撃のような効果があり、その巧みさには感心させられる。ますま

すのご健詠を期待する。

束縛とゆめ思ふなよ切り戻しせぬ庭の菊に縄をかけつつ
人日の雪ひとしきり降りしきり鴨居の溝の翳らひにけり

瀬戸内 光

「切り戻し」とは長く伸びすぎた茎を切って、また花をたくさん咲かせることのようなのだ。この方はそのようなことはせず、長く伸びすぎた菊を縄で縛って倒れないようにする。縛りながら、「束縛しているのではないよ」と花に言い聞かせているのだろう。さりげない園芸の二コマだが、そんな言い訳をしながら植物を育てる細やかな気遣いにホッとさせられる。二首目の「人日」とは五節句の一つで、一月七日のこと。中国の言い伝えで、一日から鶏、狗、羊と動物占いが始まり、七日によりやく人間を占うことからそう呼ばれてきたようだ。正月のお祝い気分も収まり、七日ごろにはまた人の日常が始まる。「ひとしきり」と「降りしきり」の重なりは気になるが、雪の日の薄暗さを鴨居の溝の翳に焦点を当てたのは、「人日」のあとの日常の始まりにふさわしい気分を想起させる。

ガラガラ光渦巻くアラブの地我が汗一滴土漠に沈まん

風樹 茂

作者は砂漠の地の地雷撤去などに携わる国際援助活動をしてきた人である。その過酷な地での体験は想像に余りある。臨場感が伝わってくる歌である。土漠に落とした自ら

の汗一滴は、その地での活動の過酷さの象徴であろう。日本の地からは遠い国のひりひりとする現実がある。

虚ろなる命の意味を問ふわれに背を向けしまま慈刻む母

清水隆司

心折れた作者が、母親に「命ってそんなに大切なものなの」「生きる意味って何なの」とでも聞いたのだろうか。いかなる状況での問いなのだろうか。いずれにしても、子を産み落とした母親の身になれば、最も聞きたくない切ない質問ではないだろうか。母親のほうも「命を全うすることとは……」と模範的な答えを言う状況ではなかったのだろう。黙って「背を向けしまま」長葱を刻み、食事を作り続ける母の背中は何を語っていたのだろうか。デンマークの画家にウィルヘルム・ハンマースホイという画家がいる。後ろ向きの女性を描いた絵が印象的である。背中は何を言う。この歌の母親の背中も雄弁に何かを語っているのだろう。いましも葱を刻む音が聞こえてきそうである。作者はその背中から何を感じたのであろうか。意味深い余白を感じる歌である。

あの時の波を探してうたた寝の夢に揺られて故郷の海
夜汽車より母に抱かれし子の眺む窓の外には月流れゆく

久保信之

一首目の「波」・「海」・「揺られ」、二首目の「夜汽車」・「窓」・「月」・「流れ」ときわめて類想的な単語が連想

ゲームのように使用されている。いわゆる月並みな歌になりがちなのであるが、二つの歌に流れている郷愁や幼いころの母との思い出の光景が切々と素朴に伝わって、心に染みてくる歌である。技巧に走らない歌の良さというのもある。思いが勝っているということなのかもしれない。

次は奨励賞の方々の歌である。

争わぬ縄文の末裔の誇りもち猛きネブタの綱引く吾は
護衛艦船縁に寄る白鳥に兵は餌やる夕陽に染まり

竹浪和夫

縄文人の血を引いているであろう吾は「争わぬ縄文の末裔」という自負心を持っているのだろう。青森ねぶた祭りは猛々しいが華麗でどこか哀調も感じ、はんなりと平和的である。ねぶたの綱の引手は猛々しさと和やかさを兼ね備えているようだ。二首目、白鳥も餌をやる兵士もひとつになって夕日に染まっている。緊張の中でも、平穏な風景にホッとする瞬間を切り取った一首。

窓を打つ幽かな雪に遠き夜のレコード針の音を思へり

渡良瀬愛子

雪が窓を打つ音を捉え、それをかたて耳にしたレコード針が盤面を滑る音に例えるという、その研ぎ澄まされた繊細な感覚に魅了される。レコード針は過去を想起させノスタルジーを引き起こす。しかし「思へり」と添える必要があるか。短歌の主語は基本的には「われ」。音を聴いてい



福田淑子 ふくだ よしこ
1950 東京都生まれ
2003 短歌評論「馥郁たる叛逆—斉藤史論」で第70号『文芸埼玉』評論部門入選

07「孤独なる球体」で第8回大西民子賞受賞

18 第一歌集『ショパンの孤独』で第13回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門優秀賞
第二歌集『パルティータの宙』短歌誌「波濤」を経て、現在短歌同人誌「まろにゑ」・現代短歌〔舟の会〕、歌誌「コスモス」日本歌人クラブ会員、俳句同人誌「花林花」所属 俳句誌「架け橋」会員



総評
数多くの方の意欲ある歌に触れることのできるのはい幸である。小誌の短歌賞には常連の方々もいるが、その都度、それぞれの方の真剣な人生の歩みを垣間見るようで居住まいを正したくなる。お互いに頑張ろうと声をかけたくなる。日常のじたばたの中で、折につけ、短歌を詠むことで感性や語感が研ぎ澄まされていくとしたら、それはありがたいことだ。想い多くして、言葉届かずということもある。多くの書物を読み、人々の言葉に耳を傾けるうちに、これだと思ふような表現が降ってくるに違いない。
自らの人生を慈しみ、同時に他者を受け止めたい。韻律の言葉で自他を見つめ、世界とかかわることはまだまだ奥深い先があるのではないかと思うこの頃である。



「妣」は亡くなった母のこと。郭公の鳴き声は鮮明で人の声かと思うほど。ゆえに郭公の鳴き声で、亡くなったお母様に起こされた記憶を呼び覚ますこともある。ところどころで「溜池あたり」という言葉が歌を締めまらなくしている。なぜ「溜池あたり」なのか、それは近くなのか遠くなのか、読み手ははぐらかされてしまう。
雨過ぎて白き一華のはかなげに香る雫を小指に濡らす
永遠のあらば瞬く星にこふ彼岸の姉よ笑顔のままに
華央子
亡くなられた姉を想う歌。現世でも笑顔の魅力的な姉上でいらしたのだらう。あの世でもその笑顔でいてほしいと、姉妹の情を感じさせる歌である。だが、「永遠のあら

ば」という仮定法がどこに効いてくるのか、読み解きにくい。「もし永遠がないならば」星にこふこともないのか、「永遠はないから笑顔でいられないだらう」ということを示唆しているのか、読みが揺れてしまう。
柿色の枯れ葉散る道ポストへと薄墨はがきコトリと落とす
瀧口洋子
どなたかお身内の方が亡くなったのであらう。「柿色の枯れ葉散る」彩鮮やかな道と「薄墨のはがき」の色の対比が効いていて切ない。「コトリと落とす」も哀切感を想起させる。ただ、亡くなった方がどなたなのかわからないと、哀切感の焦点が合わないままである。
紛争に打ち壊されしわが母校いまや風巻くタワーとなれり
室町 眞
詞書に「四十年ぶりの母校を訪ねる」とある。母校とは、おそらく九段界限の一九七〇年代に大学紛争のあった大学のことであらう。例えば、この四十〜五十年の間に法政大学には天高く聳え立つボナソアードタワーと呼ばれる校舎が建った。紛争のころには古い校舎の学内は、ボナソアードの銅像が壊されたり、学生が占拠したりして荒れ放題であったが、このあたりの多くの大学の校舎はどれも高層ビルに建て替わっている。時代の変遷を感じさせる一首である。また、風化していく時代の記録でもある。

る主体をここで明示するとせつかくの夢幻的世界を現実の世界に引き戻してしまうように思えるのだが。
山峡に生きる農家の気骨あり天に向かひし棟の高さよ
新井巳喜雄
深い山峡にある農家の屋根の高いところにある棟。山々と競うかのように天に向かって高くそびえて立つ屋根の棟に、農に生きるものの気骨を感じる。力強い端正な歌いぶりである。「高さよ」と詠嘆の助詞で終わっていることで作者の思いが直截に伝わってくる。
妣が呼ぶ声かとはかり目覚めれば溜池あたりで郭公鳴きたり
武藤養子